

## 考察と今後の課題

本研究では、障害理解を主題とする「総合的な学習の時間」において、体験学習と体験発表を重視し、多学年にわたって重層的に展開される授業の構成を目指した。そのために、指導内容の検討と、通級指導教室と通常の学級との連携のあり方についての検討を、実践的に行ってきた。その中で、A小学校では6年間にわたる指導が計画され、実施されてきた。授業は現在も進行中であり研究の継続が必要であるが、ここでは、現時点における本研究の考察と今後の課題を整理する。

### 1. 「総合的な学習の時間」における指導内容について

本報告書では、視覚障害体験学習について詳述したが、視覚障害以外にも、難聴・言語障害体験、車いす体験、高齢者体験を題材とした授業を展開している。すべての体験学習において、①筆者らから障害に関する基礎知識を学ぶ、②十分に時間をかけて障害の疑似体験を行う、③障害のある人の暮らしや支援について調べ学習をする、④障害のある人や高齢者施設ケアマネージャに来校してもらって話を聞く、⑤体験内容や体験を通して自分が何を考えたか(第6学年では、どういう社会にしていきたいか)を発表する、の5項目を行ってきた。

子どもたちは、①と②によって、障害のある人に対して「なにもできないのではないか」とか「かわいそうだ」と考え、障害に起因する困難さを大きく感じていた。しかし、②で疑似体験を繰り返したり、③の調べ学習をするうちに、障害のある感覚に代行する感覚の存在や、感覚や運動を補助する介助器具を有用性に気づき始めた。さらに、④の実際に障害のある人の話を聞くことによって、子どもたちは、障害があっても生活のすべてが困難になるわけではなく、それぞれの生活を生き生きと楽しんでいることにも気がついた。印象的な場面はたくさんあるが、中でも、視覚障害のある人の「海外旅行に行くのが好き」ということばや、車いすを利用している人の「車いすサッカーで優勝したい」ということばに、子どもたちが目を輝かせ、思わず喚声を上げる場面もあった。筆者らも通常の学級の担任も、障害のある人に実際に会って話を聞くことの大切さを再認識した。

以上から、障害理解を主題とする授業を展開する上で、障害の疑似体験を行うことは障害に起因する不自由さや困難を理解する上で重要であるが、その際には、十分に時間をかけることによって、障害のある感覚や運動機能を代行する感覚や運動機能があること、また、点字、白杖や介助機器など、さまざまな工夫や支援があることに子どもたちが気づくまで行う必要があることがわかった。そうしなければ、障害のある人は、「何もできず、かわいそうな存在」として子どもたちに認識されてしまう恐れがあり、十分に注意しなければならない。さらに、疑似体験に加えて、障害のある人に実際に会い、話を聞くことを取り入れることの重要性がわかった。このことにより、障害の有無を問わず、誰にもできることとできないことがあり、できないことは助け合っていくという認識を持てるのではないかと考えられた。このように、十分に時間をかけた疑似体験と障害のある人と出会う経験の両方が、障害理解を進めていく上で必須であると考えられる。

## 2. 通級指導教室と通常の学級との連携のあり方について

本研究では、通常の学級との連携の必要性を感じていた通級指導教室と、「総合的な学習の時間」で障害理解を主題にしたい通常の学級のニーズが一致することによって、両者の協働による「総合的な学習の時間」の授業が開始された。両者の「協働」はすぐに実現したわけではない。「総合的な学習の時間」に先立ち、筆者ら、通級指導教室担当者と特殊教育研究者とが、通常の学級で障害理解の授業を行って、通常の学級の教師や子どもが、通級指導教室とその担当者や障害についての関心を高めていたことが、「協働」による授業を可能にしたのではないかと思われる。すなわち、通級指導教室（特殊教育担当者）からの「発信」があってこそ、「協働」による授業が実現したと考える。

実際の「協働」においては、授業開始までに1ヵ月半もの長時間を要した指導案作成の例のように、筆者らの予想外のこともあった。しかし、通常の学級の担任との十分な協議によって、筆者らは、専門的知識の提供と体験内容の具体化等を、通常の学級の担任は、担任する学級の特性に応じた授業の進行と個々の児童の学習支援等を、という形で、それぞれが責任を持てる範囲を明確に役割分担でき、以後の授業展開がスムーズなものになった。特に、個々の学級や児童の特性に応じた学習支援は、筆者らには難しい部分であり、通常の学級の担任との協働はこの授業の展開において不可欠であった。

本研究のように、通級指導教室担当者と通常の学級の教師とが、協働し、親密な関係になっておくことは、通級児にとって利点が大きいと思われる。また、今後、様々な教育的ニーズを持った子どもが通常の学級で学ぶ機会が増えると思われるが、そうした際にも、通級指導教室と通常の学級との連携がスムーズに行われていくと期待できる。

## 3. 今後の課題

本研究では、A小学校において2年間にわたって「総合的な学習の時間」を展開した。その中で、4種類の障害体験学習の指導案を作成し、6年間にわたって学習するプログラムを構成した。筆者らと通常の学級との協働もA小学校では定着しつつある。また、子どもたちの発表や感想の中には、障害観、障害者観の変容がうかがえる。

これらを踏まえ、今後の課題は、以下の2点である。

### ① 体験学習内容について、さらに吟味、精選すること。

それを通常の学級の担任が利用することによって、担任の個性や子どもたちの特性に応じた学習プログラムが展開できるようにしたい。

### ② 一人ひとりの子どもの変容を詳細に分析する評価の枠組みを作成すること。

本研究は、子どもたちの変容の分析を短期間に横断的に実施した。今後A小学校の6年間のプログラムを受ける中で、一人ひとりがどのように変容するかを縦断的に分析したい。現在、子どもたちのワークシートはすべて保管されており、それらを分析する枠組みを検討中である。

## 謝 辞

本研究は、町田市立鶴川第三小学校の全面的な協力がなければ実施できなかった。

安藤正明前校長先生、荒井行雄校長先生、太田真也前教頭先生、松本さえ子教頭先生には、実践研究全体に関してご指導をいただきました。研究協力者を引き受けてくださった豊田弘巳先生には、筆者に実践の場とさまざまな助言をいただき、本報告書作成のための資料も快く提供していただきました。また、授業の詳細な記録と沢山の助言をいただいた三浦八重美先生をはじめ、教職員の皆様、白杖の加工や雨天時の車イス体験でお手数をおかけした用務主事の方々、授業に参加してくださった児童の皆さん、安全確保のため参加してくださった保護者の皆様、児童の皆さんに貴重な体験談を話してくださった方々に、改めて感謝申し上げます。